日本人に受け入れられる福音

２０１８年５月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

　筆者はいたずらが好きです。まじめな牧師や神学生たちを前にすると、つい、煙にまいたり、常識を覆したりしてみたくなるのです。

「次の言葉が正しいと思う人は手を挙げてください。」
　いろいろなセミナーや研修会あるいは教室で、いくども同じ問いを出しました。

「私たちは、キリストが自分の罪を身代わりに背負って、十字架の上で死んでくださったと信じることによって救われます。」

　いままで、信徒はもちろんすべての牧師や神学生たちが、「これは正しいことばです」と答え、間違っていると主張した人は一人もいません。

　でもこれはとんでもない間違いであり、ギリシヤ的思考に支配された西欧プロテスタント神学の弊害です。キリストが、私たちの罪の刑罰を身代わりに引き受けてくださったというのは、聖書の教えであり、事実であり、真実です。でも、私たちは事実を信じて救われるのでも、真実を受け入れて救われるのでもありません。

　事実については良く分からなくても、救い主であるキリストというお方を信じて救われるのです。真実についてはまだまだ理解していなくても、神の子であり救い主であるイエスというお方を信頼するならば、救われるのです。

　私たちは救い主である神の子、イエスという俗名を与えられた方、肉体を採られた言葉である方を信頼して、救われるのです。事実や神学的ステイトメントを信じて救われるのではありません。

　教会という組織に加わり、キリスト教という宗教団体に所属するためには、その教会や宗教団体の主義主張、あるいは教理や信仰告白というものを、受け入れなければならないことでしょう。でも、神の救いに入るためには、キリストというお方を信頼するだけで充分なのです。私たちを救うのは、教義でも教理でも神学でも告白でもなく、私たちのため

に命を捨て、三日目に甦ってくださったお方だからです。

ところが私たちは、教義とか教理あるいは信仰告白というものを、非常に大切なものとして教えられてきました。それを文字通り信じ受け入れることが絶対条件とされていたのです。信仰を、神というお方に対する私たちの心の動き、心のあり方としてではなく、一定の教えに対する同意であるように理解してきたのです。信仰を私たちと神との心の交流、暖かい人格と人格（神格？）との交わりとしてではなく、冷たい神学的言葉の受容と考えてきたのです。

このような信仰感覚を持って、私たちは理論や理屈ではなく情緒や感情の世界で生きる、日本文化の中で生活しています。そして、信仰を理論として理解しようとはせず、情として受け入れようとする傾向が非常に強い日本人に、理論的キリスト教を理解させようと一所懸命なっています。

私たちの経験から

ちょっと考えて見ましょう。自分たちがキリストを信じるようになったとき、私たちは西欧神学の理屈手順に従って理論的に信じたのでしょうか。私たちも日本人です。きわめて情緒的に、理論などほとんど無視したまま、キリストを信じたのではないでしょうか。

あるいは、些細なきっかけで教会に来て、信徒たちと仲良くなり、居心地が良くなるうちに、なんとなく、クリスチャンになったような心持になり、真似をしてお祈りなんかをしているうちに、自分もクリスチャンになったのだと、思うようになったのかも知れませんね。

牧師や年季の入ったクリスチャンたちは、罪だ、赦しだ、贖いだ、十字架だ、いや悔い改めだ、罪の自覚が先だと、かしましいことを言っていましたが、私たちはそのようなことはほとんど理解できませんでした。

理解できなくても、キリスト教の神を信じようと思い、よく分からなくても祈り、自分はクリスチャンであると、思い込むようになったのではないでしょうか。きわめて情緒的なのです。日本人に限ったことではないとも思いますが、日本人は、特にそうなのです。

本当のところ、牧師や年季の入ったクリスチャンは、個人伝道法などの訓練を受けて、立派なことを言うことはできますが、彼らの理屈ばしった話を聞いてクリスチャンになろうと思った人は、あまり多くはありません。

クリスチャンになった人のほとんどは、クリスチャンになりたての、聖書の教えもあまりわからず、まだまだ罪の世の臭気を撒き散らしている、どうしようもないクリスチャンのつたない証や体験談に心を打たれて「自分もその神を拝んでみよう」「その神に祈ってみよう」と、クリスチャンになったのです。

西欧神学が教えるように、天地創造の神の愛と聖さの理解、自分の罪の自覚、キリストの十字架の意味、神の愛への信頼、罪の悔い改めなどを、順序正しくしっかりと通ってクリスチャンになったのではありません。

もう少し、私たちの体験から考察してみましょう。病院で死の床にある人が、最後に「キリストを信じます」と告白したと、喜んでいるクリスチャンがいました。牧師も大喜びで洗礼（滴礼）を授けました。でもその病人は、どれほどキリストについて理解していたのでしょう。罪についての自覚はあったのでしょうか。悔い改めはしたのでしょうか。

そんなことをいちいち問いただすクリスチャンは、あまりいません。死の床のほんのわずかの信仰告白、信仰告白と言えるかどうかさえ分からない言葉でさえ、私たちは告白と認め受け入れるのです。十字架の上で、「あなたがみ国の権威を持っておいでになるときには、私を思い出してください」と、キリストにお願いした罪人の告白のように、有効な告白だと信じるのです。

ところが、教会や研修会などで教えられる西欧神学としての救いは、このような私たちの経験とは異なっています。それで、日本人クリスチャンとしての自分たちの経験は、間違っている。少しばかり軌道修正をしなければならないと、思わせられるのです。

何しろ、日本のキリスト教はまだまだ未熟です。とても西欧神学に太刀打ちできるとは思えないので、自分たちの経験は「いささかイレギュラーだったのだ」と、思い込ませられるのです。

それで理論的な神学を懸命に学び、固い神学の土台に立ったクリスチャンとなり、神学的な個人伝道を試みるようになります。そうなると、もう、私たちの個人伝道に納得してクリスチャンになる人はいなくなります。クリスチャンになりたての頃の、何にも分からないまま、ただ、「神様はすばらしい、キリストはすごい」と言っていた頃のほうが、友人や知人を信仰に導くことができたのです。

アブラハムの信仰から

すでに随所で述べてきたことですが、信仰の父アブラハムは、私たちのプロテスタント神学が教えるような、キリストの贖いの知識は持っていませんでした。キリストのキの字さえ知りませんでした。いわゆる救いの前提である罪の意識も持っていなかったようです。当然、悔い改めもしていません。でも、アブラハムは信仰によって救われました。その信仰によって救われたという事実は、すべての人の模範となるべき救いの道です。

また、アブラハムが抱いた信仰は、救いのための信仰とか、永遠のいのちへの信仰とか、神の赦しへの信仰とかいうものではありませんでした。そのようなこととは一切関係がない、老齢になってから自分に子どもが与えられるという、神の約束を信じただけの信仰です。そのような信仰、あるいは信頼でも、神は救いに至る信仰とみなし、受け入れてくださったのです。

その上アブラハムの信仰は、私たちの信仰の模範としてはいささか情けない、風にもてあそばれる灯のような信仰でした。約束を与えられた当初は確かに信じたものの、少し待つうちに確信が揺らぎ、不信仰な妻の言葉に惑わされて、エジプト女の召使によって子をもうけるに至りました。そんな程度の信仰だったのです。

アブラハムが私たちの信仰の父だったという事実は、少なくてもこの出来事では「立派な信仰」の父なのではなく、とんでもなく弱々しい信仰でも、神に受け入れていただけるという、模範を残したという意味で、私たちの信仰の父でなのです。

アブラハムが義とされたのは、アブラハムが義とされようと願ったからではありません。義などということを、アブラハムは意識もしなかったことでしょう。知らなかったのです。でも、神はアブラハムの揺れ動く信仰を喜んで受け入れ、義としてくださった。すなわち救いに入れてくださったのです。神は信頼されること、信じられることをそれほど喜んでくださるのです。

さらに、アブラハムが義とされる信仰をもったのは、すでに神との交わりを幾度も経験し、神の導き、神の備え、神の守りを体験してからのことです。神との交わりが、神の救いを体験する以前にあったのです。これもまた大切な点です。神のことを何も知らないままの、目暗滅法な信仰ではないのです。

アブラハムに関わるこれらの出来事を神学的に考察すると、選民ユダヤ人に与えられた律法を、前提として構築されたユダヤ人のための神学とは、異なって来ます。また、ユダヤ人の選民の神学から発展した、初代キリスト教神学とも、異なった側面が現れて来ます。

パウロの神学から

パウロの神学は、ユダヤ教の中の一派に過ぎなかった初代キリスト教を、人種、民族、文化、時代を超えた、普遍的な福音としたものです。ユダヤ人も異邦人も、すべての人間は信仰という同じ条件で救われるのであって、そこに差別はないということです。

ところがパウロは、もともと優れたユダヤ教の学者で、ユダヤ人の歴史と旧約聖書、つまりユダヤ教の神学に精通した人物でした。その彼が、アブラハムの信仰は、ただアブラハムの救いのためにあったのではなく、ユダヤ人異邦人を問わず、すべての信じる者の信仰の模範としてあったのだと語り、アブラハムの信仰による義に焦点を当てて、新しい神学を立て上げたわけです。当時のほかのクリスチャンたちとは違い、ユダヤ人の選民意識に拘束されず、福音の普遍性を明確に理解し、それを教え、それを宣べ伝え、そのために命を賭けたのです。

パウロの福音理解は、まさに見事の一語に尽きます。とはいえ、パウロもまた時代の子、文化の子です。パウロに啓示された普遍的福音の真理は、パウロの学びと経験という眼鏡で理解され、周囲の状況という必要に対応して、神学的に構築されたのです。普遍的福音の神学は、空白の心に啓示されたのではなく、無色透明の社会で構築されたのでもないのです。

パウロは異邦人への使徒として知られ、異邦人を対象に宣教の働きをしたと考えられています。ところが実際は少しばかり異なっています。神学的な意味では、パウロは間違いなく異邦人への使徒でした。しかし、実際的宣教という面では、パウロは普遍的福音の理解を明確にして、多くの名もない信徒たちの異邦人伝道に、大きな励ましとなり、影響を与えただけで、それ以上ではありません。

確かに異邦人の土地で宣教活動をしましたが、パウロが福音を語った人々の「異邦人度」とでも呼ぶべきものは、現代の日本の「異邦人度」とは比べようもないほど、ユダヤ的であったのです。本当のところ、パウロが完全な異邦人を相手に宣教をしたことは、あまりありませんでした。

パウロが宣教したのは、当時のローマ帝国の地方都市でした。それらの都市の多くには、ユダヤ人のコミュニテイーが存在していました。10 人以上の成人ユダヤ人が合意すれば、会堂を持ち、ユダヤ人としての宗教活動と、市民活動を行うことができました。律法が読まれ、解説が行われ、勧めがされ、教育と訓戒と懲罰と助け合いが行われていたのです。

初代の教会は、この会堂形態を模倣したものだと言われるほどです。

この会堂では長老をはじめ責任者が定められ、しっかりと運営されていましたが、面白い特徴は、成人のユダヤ人が他の町から訪れてきた場合、まず、彼に話す機会が与えられるという習慣があったことです。パウロはこの習慣を利用し、新しい町に入るごとにまず会堂を訪れ、訪問者の特権を積極的に用いて福音を語ったのです。

ですからパウロは異邦人の土地を回りながらも、多くの場合はまずユダヤ人に福音を語りかけたのです。それからすでに会堂とかかわりを持っていた異邦人たち、すなわち異邦人でありながら正式にユダヤ教を受け入れていた改宗者、さらにはまだ正式な改宗者にはなっていなくても、すでにユダヤ教を心で受け入れていた熱心な人たち、あるいはユダヤ人に同調し学ぼうとしていた、異邦人たちに語りかけたのです。

パウロが完全な異邦人の環境に入って、異邦人たちに語りかけたという例は、比較的少なく、使徒の働きの記録からだけいうと、ルステラとアテネでのことだけです。あるいはマルタ島での出来事も、これに加えられるべきかもしれません。

したがって、パウロが考えた異邦人のための福音は、その土台においては確立され、揺るがないものではありましたが、完全に発展を遂げたものではなかったと考えられます。その真髄、背骨、礎はできあがっていましたが、その適応、枝葉、花や実にはまだ及んでいなかったわけです。

それを築き上げるのは初代教会以後の、教会の構成員の大部分が異邦人となり、教会を取り巻く人々がみな異邦人となった、第二世代、第三世代教会の役割だったのでしょう。ちょうど、三位一体の神学の基礎は聖書に示されていながら、その明確な理解は、数世紀を待たなければならなかったのと同じです。

残念なことに、第二代、第三代の教会、さらにそれを継承した教会も、異邦人のための福音理解ということにおいては不十分でした。ユダヤ人のために与えられた律法の解釈と、その解釈の異邦人への適応という、パウロの神学のままに留まってしまったのです。教会が全員異邦人のものとなり、教会を取り巻く人々もみな異邦人となったにもかかわらず、キリスト教自体がローマの国教となって、強い権力を持つに至ったために、異文化の人々に対する神学の文化的適応どころか、宣教そのものについてさえ、あまり考えなくても良いようになってしまったからです。

それが今日の西欧プロテスタント神学にまで及び、１９世紀以降、積極的に異邦人への

宣教を考える教会になっていながら、彼らの宣べ伝える福音の神学は、いまだにパウロの理解した「ユダヤ文化の中の神学」のままなのです。そのユダヤ的感覚の福音理解で、日本人に、効果的に救いを伝えるのは非常に困難だということです。パウロはあくまでもユダヤ人として、ユダヤ人の立場から、ユダヤ人の感覚で、福音の普遍性を論じました。福音は、ユダヤ人の枠内にとどめられるべきものではない。その枠を取り壊し、全人類のための福音、普遍的福音としなければならないと奮闘したのです。しかし日本人として、まったくの異邦人として、日本人である私たちは、福音は初めから全民族、全人類を対象としたものであるという理解から、考えはじめなければなりません。ユダヤ人は、その普遍的福音を完成させるために、手段、経過として用いられていたに過ぎないのです。

日本人は、一方では八百万の神々と言っていながら、他方ではその八百万の神々をばかばかしい幼稚な概念と断じて、神の存在そのものさえ否定してかかるようになっています。（日本語には単数と複数の区別がないために、日本人の感覚の中では、神と神々の間にも明確な区別がありません）日本人に無神論者が多い理由のひとつは、八百万の神々の幼稚さのためだと考えられます。ところがこの無神論に走る同じ日本人が、心情的には、大きく、高く、深く、豊かな神、恵みと哀れみに富み、日本人を慈しんでおられる神、よくは分からないけれど、心のなかで確かに感じる神をひそかに認め、実質的には、その神が唯一の神でもあるかのように、感じているのです。

それでいながら、心の奥底にある気高い神の意識を、理性と頭脳と言葉で表現すると、どうしてもばかばかしい多神教に陥ってしまうために、日本人は、宗教を理論的に整理して表現するよりは、そっと分からないままにしておき、幽玄な世界に大切に残しておこうとするのです。そこにあくまでも理論的に、また神学的に神と救いを提示しようと入ってくるキリスト教は、なかなか受け入れられないのです。

また、ヒンズー教的世界観と死生観を基本にした仏教は、先祖祭りを定着させて家とイエを強く結びつけ（イエ＝先祖と子孫という縦の関係。家＝現時点での親族という横の関係）血縁関係を認識させることによって、社会の中の個人のアイデンティティ作りに貢献する一方、独特の諦観や侘びさびの感覚を抱かせて、日本人としてのアイデンティティを確認させる働きをしていると言われています。出エジプト記以降に記されたユダヤの神観を背景に、ギリシヤ思考で作り上げられた、西欧プロテスタント神学のままで、この仏教的日本人を説得するのは至難の業なのです。

日本人は、自分たちの神道的感覚と、仏教的感覚を非常に大切にしています。それが長い間の確固たる文化となっているのです。自分たちの文化に誇りと確信を持てないでいる人々の間では、少々無茶な宣教でも、ある程度の結果を見ることができます。キリスト教

を、進んだ文化として受け入れることができるからです。しかし日本のように、特定の宗教文化を、すでに「誇るべき文化」として持ち続けていたところでは、宣教は効果をあげないのです。仏教文化が定着していた東南アジア、ヒンズー教が浸透していたインドなどでも、類似したことを見ることができます。

明治政府は、キリスト教を西欧の精神的基盤として認めながらも、野蛮な宗教として退け、神道を日本の精神基盤として据える道を選びました。いわゆる「和魂漢才」を言い換えて、和魂洋才を掲げたのです。西洋の進んだ技術、産業、教育、芸術などを積極的に受け入れながら、宗教だけは退けたのです。日本人全体としては、今もその精神を根強く残していると考えるべきです。

悔い改めについて

アブラハムは悔い改めないで義とされました。それはすべての信仰の模範です。ところがキリストの教えを聞いても、パウロの書いたものを読んでも、使徒の働きの記述に目を向けても、義とされるためには、悔い改めが絶対必要条件であるように思われます。義とされる原則が変わったのでしょうか。聖書の中に矛盾があったのでしょうか。

悔い改めるには、自分の罪についての自覚と、罪に対する憎しみと、罪を犯した自分への悲しみが必要です。少なくてもこれだけの理解が必要なのです。西欧プロテスタント神学では、さらに、赦しの前提となるキリストの無罪性、キリストの代償の死と甦りなどの知識さえ要求されます。

だから、もしも救いの信仰に悔い改めが必然だとするならば、救いの信仰は理解するという行為を前提とする救いとなり、理解できないものは救われないことになってしまいます。はたして救いは、私たちの知識、私たちの理解に関わることでしょうか。それともまったく神のみ業に関わることで、神の知識、神の理解によるのでしょうか。

救いがもっぱら神の側の知識と神の側の行為に関わることで、人間に必要なのは、ただ信頼するという心の行為だけだとすると、なぜ、キリストは悔い改めを要求し、パウロは悔い改めを語り、使徒の働きには悔い改めの勧めが記されているのでしょう。

キリストの教えとユダヤ的背景

キリストが教えをされたのは、直接的にはあくまでもユダヤ人に対してでした。キリストが強く悔い改めを迫ったのには、ユダヤ的な背景という条件がありました。相手がユダ

ヤ人だったために、あれほど強く悔い改めを語り、また、迫らなければならなかったのです。

ユダヤ人たちは何世紀にもわたって救い主の出現を願い、期待し、待ち焦がれていました。ユダヤ人が夢見ていた救い主は、もちろんユダヤ民族を宗主国から解放し、独立国家を設立してくれる、軍事的なまた政治的な救い主でした。そして、ナザレ出身のイエスと呼ばれた男ほど、この救い主キリストにふさわしいと思われる人物は、いなかったのです。

病気を癒し、足萎えを立たせ、手が利かなくなった者の手を治し、目の見えない者の目を見えるようにしたということが、軍事的には非常に大きな希望となりました。戦いで傷ついても、救い主は癒してくださるのです。それればかりか、死者でさえ再び生きるようにしてもらえると、期待できたのです。

昔、信長がいちばん恐怖を感じた相手は、一向一揆の人たちだったと伝えられています。死んでも命があると信じて、死を恐れずに戦に出てくる一向宗の農民ほど、恐るべき敵はなかったわけです。ユダヤ人がイエスという男をキリストとして歓呼して迎えたとき、彼らの中にもそのような期待があったことは、容易に想像できます。

キリストが 2 匹の魚と 5 つのパンで 5 千人を養ったとき、人々は、すぐにもキリストを王として立て上げて、軍事行動に移ろうとしました。この奇跡は、戦いには絶対に欠かせない困難な兵站作戦を、不要とすると考えられたからです。つまり、食料の補給は心配しなくても良くなるからです。日本軍が中国戦線で敗退したのは、この食料や医薬品あるいは弾薬を補給する、兵站作戦がなっていなかったからだといわれていますが、キリストの時代も、補給の大切さは誰もが知っていました。２匹の魚と５つのパンで、成人男子だけでも５千人の人々を養うことができたキリストは、軍事作戦の食糧問題を一気に解決できると思われたのです。

ところがキリストは、確かに約束された救い主ではありましたが、ユダヤ人たちが期待した軍事的な救い主でも、政治的な救い主でもありませんでした。キリストの国はこの世の国ではなかったのです。第一降臨のキリストの救いは、罪と罪の刑罰からの救いであって、霊的な救いといわれるものだったのです。そのために、ユダヤ人たちは罪の自覚を持つ必要があったのです。

ユダヤ人たちは神を知っていました。民族として、幾度も幾度も神を体験していました。言い方によっては、神を信頼さえしていたのです。ユダヤ人はほとんど例外なく、宗教的に熱心で、神を信じていたからです。ところがその神信仰は、神が救いに入れる条件とさ

れた信仰には届かない信仰だったのです。

ユダヤ人は、自分たちが選民であることを誇り、自分たちは神の前に正しいものであるという、夢想を抱いていました。自分たちが救われるのは、むしろ当然なことと思っていたのです。しかしキリストは、罪と罪の刑罰からの救い主として来てくださいました。ユダヤ人たちに必要だったのは、神についての知識ではありませんでした。ユダヤ人の神意識は、たとえ完璧ではなかったとしても、救いのための予備知識としては充分でした。彼らに必要だったのは自分が罪人であるという自覚であり、自分には罪から救い出してくださる救い主が必要だという、新たな知識だったのです。

キリストはその罪の自覚を促すために、自分を正しい者と思い込んでいる人々には、あえて非常に厳しい態度をお取りになりました。しかし自分の罪に気づいて痛み悲しんでいる者には、とても優しく接してくださいました。実際にその人が正しく立派な人物であったかどうかよりも、罪を自覚していたかどうかが、キリストにとっては大切だったのです。罪の自覚があれば、自分は聖い神の前に出るにはふさわしくないことが分かり、キリストが提供してくださる罪とその刑罰からの救いに、望みを置くことができるけれど、罪の自覚がないままでは、キリストの提供する赦しを得ることができないからです。

そこでユダヤ人に対する福音では、罪の自覚と、罪に対する憎しみと、罪に背を向けて神に喜ばれる生き方をしたいという望みの表現として、悔い改めが勧められ、神に許しを求めるように励まされたのです。新約聖書の中で、「悔い改め」という言葉の大部分は、キリストの言行録である福音書で用いられているのは、そういうわけです。

パウロによると、旧約聖書の律法は罪の自覚を生じさせるための「養育係」でした。多くの動物の犠牲は、キリストがささげられた完全な犠牲を指し示すものでした。そしてそれら全体が、神の愛と聖さ、キリストを通しての贖いのみ業を教えるためのものでした。そのように救いに至る準備が与えられていたユダヤ人には、悔い改めが強烈に求められたのです。西欧プロテスタント神学が教える信仰による救いは、ユダヤ文化の背景ではまさに正しいのです。

間違いは、キリストとそのお働きを理解し、自分の罪を自覚して悔い改めない限り、救いはないということを、ユダヤ人以外のすべての人にも当てはめようとすることです。キリストの贖いのみ業に対する知識と、罪の悔い改めは、すでに神についての知識と体験を持ち、救い主についての知識もかなり身に付けていた、ユダヤ人に対する要求であったとのです。

アブラハムはユダヤ人の祖先でしたが、ユダヤ人ではありませんでした。彼は、体験を通しての神知識としては、相当高いものを持っていました。でも、知的な理解はあまり深くなかったようです。もちろん、救い主についての知識はまったく持ち合わせていませんでした。ですから、彼には悔い改めを要求されていないのです。

モーセ以降のユダヤ人たちも、まだ救い主に対しての理解と希望が不明瞭であったために、しばしば悔い改めを勧められていながら、新約聖書が教えるような意味での悔い改めは求められていません。

使徒の時代

パウロの宣教と教えの対象も、ユダヤ人かユダヤ文化を受け入れていた人々が、大部分でした。使徒の働きも、そのようなユダヤ文化の影響の下での活動の記録です。新約聖書は、ユダヤ文化を前提に書かれ、ユダヤ文化の土台の上に、キリスト教の神学を構築したのです。それは決定的にユダヤ的なのです。

パウロは、福音をユダヤの文化と民族主義から開放したと言われています。本当のところパウロは、福音の普遍性という神学の分野においては、まさに異邦人への使徒の名にふさわしく、ユダヤ人も異邦人も同じ信仰によって救われることを明らかにしました。ただし彼自身は、まだまだユダヤ文化から完全に抜け切ってはいなかったのです。信仰による救いを掲げて鋭く割礼に反対したのは、まさに、ユダヤ文化にまとわり付かれていたためだったのです。

ではキリストの昇天以降の、弟子たちによる異邦人宣教に関しては、どうだったのでしょう。使徒たちは、悔い改めが全世界に述べ伝えられること、すなわち異邦人にも伝えられ、求められることを語っています。ただしその言い方にも、ユダヤ文化の背景があったことを理解しなければなりません。使徒たちをはじめすべてのクリスチャンたちは、まだ普遍的福音という真理を理解しておらず、すべての異邦人は、まずユダヤ人にならなければ救われないと、固く信じていたのです。

福音の普遍性が明らかになった後でも、ユダヤの背景を残していた教会の中では、当然のことのように、悔い改めが語られていたと推測できます。教会全体がユダヤ教の中の救い主についての予言や、救い主を予表するさまざまな犠牲についても知っていましたし、罪の意識を強くもっていたのです。もちろん、ナザレ人イエスの十字架についても聞いていました。パウロも、ユダヤの背景を残す教会への書簡の中では、わずかながらですが悔い改めを説いています。

ところで使徒の働きの中には、特異な記事がひとつ残されています。パウロがアテネの町で完全な異邦人集団を前にして、福音を宣べ伝えたときの物語です。パウロは完全な異邦人で、偶像を礼拝していた人々に対して語りました。「神は、そのような無知な時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人に悔い改めを命じておられます」

これを読むと、単純に、パウロは異邦人が偶像礼拝を悔い改めるように迫ったのだと理解しがちです。私たちは、ユダヤ文化に生きていた人々に対する、キリストの鋭い悔い改めへの呼びかけに注目してきました。また、まだ普遍的福音を理解していなかった使徒たちの、悔い改めを前面に出した宣教の態度を見てきました。その流れの中で、このパウロの言葉を不注意に読むと、パウロは、完全な異邦人にも同じように、鋭く悔い改めを迫っていると、受け取ってしまうのです。

そこで私たちも、完全な異邦人である日本人にも悔い改めを語り、悔い改めを迫らなければ伝道にならないと思い込み、罪だ刑罰だ、悔い改めだ赦しだ、キリストだ十字架だと語らなければならなくなるのです。

ここでパウロが用いた「悔い改め」というギリシヤ語は、当時のユダヤ人たちの間で用いられていた同じ言葉と、少しばかり意味が異なっていたのだということを、考慮しなければなりません。

このギリシヤ語は、もともと、「考え方を変える」、「考えを変える」という意味だったのですが、紀元前の数世紀、ユダヤ人たちもギリシヤ語を用いだすと、彼らの間では少しずつ意味に変化が起こって、「心を変える」という風に用いられるようになりました。さらに時の経過とともに、「心を入れ替える」「悔い改める」というような、宗教的意味合いを持つ言葉に変化していき、紀元前２、３世紀に完成した、ヘブル語旧約聖書のギリシヤ語訳、普通７０人訳と呼ばれる聖書では、明らかに悔い改めの訳語として用いられています。

それで、アラム語、あるいはガリラヤ地方のヘブル語で語られたであろうキリストの教えが、ギリシヤ語に翻訳されて新約聖書とされたときには、その言葉は明らかに「悔い改め」という意味で用いられたのです。

ところが、ギリシヤの中心都市のアテネで、パウロが異邦人たちに向かってこの言葉を用いたときは、当然異邦人文化を深く理解していたディアスポラ（離散）のユダヤ人として、ギリシヤ語の元々の意味を知っていて、その意味で使ったはずです。聞いている人たちにユダヤ人はおらず、だれも、ユダヤ的な意味を知らなかったことが明らかだからです。

すると、アテネにおいてのパウロは、偶像礼拝をしている人々に向かって、あからさまに「悔い改めなさい」と語って、怒りの鉄槌をくだしたのではなく、せいぜい、何もわからずに偶像礼拝をしてきた人たちに対して、「考えを変えなさい」「心を変えなさい」という程度の、強い勧めをしたのだと判断できるのです。

私たちが語る福音

そういうわけで、私たちが語る 福音は、ユダヤ人に向けての福音ではなく、日本人への福音でなければなりません。罪についての知識も意識も薄い日本人に、罪からの救い主について語るのは、福音ではありません。しかし、天地の創造者である神をまだ良く知らない日本人に、愛と恵みに富む天地の造り主をはっきりと語り聞かせるのは、素晴らしい福音になります。

しかもこのとき、日本人が信じている八百万の神々は、間違っているなどと話し出すのは、愚かです。日本人の中に、まじめに八百万の神々を礼拝している人はほとんどいないことでしょう。かえって日本人の多くが無神論を自称しているのは、この八百万の神々があまりにも荒唐無稽でばかげていると感じるために、無神論に逃げ込んでいるのです。

無神論者を自認する日本人の多くも、八百万の神々には、不思議な力を持っているものがあると、信じている人はたくさんいます。何かに困ったとき、それらの神々にお願いすることもあるでしょう。しかし、これらの神々を敬って礼拝している人は、非常に少ないのです。多くの日本人が、八百万の神々があまりにも低次元であると感じて、通俗文化、通俗信仰としてはその存在を認めていても、まじめな礼拝対象とは認めていないのです。大多数の日本人は、心の奥底で本能的に、自然の中に潜んでおられる神、その自然を通して語りかけられる神、豊かな自然を備え、豊富な食料を与え、春夏秋冬を誤りなく廻らせ、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる、大きく、気高く、優しい存在を感じています。理論的には説明できないとはいえ、感じているのです。そのために、無神論者でいながら宗教心には寛容で、神社参拝も違和感なく自然に行っているのです。

しかも、八百万の神々を信じていると言われながら、本当のところ、日本人はむしろ唯一神を感じていると思われるのです。日本人はどこの神社でも、祠でも、まったく同じ心、同じ気持ちで参拝します。そこで祀られている神が、どのような神であるかに関心を持つことはまれです。祀られている神が大切なのではなく、その神の背後におられる本物の存在者、目に見えず、体で触れることもできず、口で説明することもできない、大きな唯一の存在、神と呼ぶことさえはばかられる、神ではない神、神以上の神が大切であり、その

神に手を合わせているのです。

また多くの日本人は、神道の教義には興味がありません。神とは教義や教理などの理屈と言葉で示すものではなく、心で感じるものだからです。だから私たちは、外国から輸入された新しい神を、日本人に理屈や神学で紹介する必要はありません。日本人が昔から心で感じてきた懐かしい神、良くはわからないまま、昔から感謝を捧げ、手を合わせてきた神が、実は、私たちクリスチャンが天地の創造者と呼び、天の父なる神様とお呼びしているお方であると語り、その神について、もう少し詳しくお話させてくださいと言えばいいのです。

作物を稔らせ、動物を生かし、海の幸と山の幸で、私たちを楽しませてくださっているお方、日本人が心で感じていながら上手に説明できなかった神こそ、私たちが信じている神であるとお話し、その神について詳しく書き記している聖書から、もっとお話させてもらえば良いわけです。日本人が上手に説明できないために、目に見えない神、手で触れることができない神、口でも言葉でも説明できなない神として、神学も教理も作らなかったのは、まさに正しかったのです。無限の神を人知で解体し、把握し、不完全な人間の言葉で表現し、説明しようなどという、西欧キリスト教神学の試みは、大海の水を計量カップで計ろうとするようなもので、この上なく愚かです。神を理解できない方として崇める日本人の信仰心は、神を解剖して説明しようとするキリスト教より、その態度において優れているのです。

一方、私たち日本人は、この神についてあまりよく分からなかったために、たくさんの恩恵を受け続けてきたのに、充分に感謝もせず、お礼もなおざりにしたまま過ごしてきたことに、気づかせるのです。神が人間に何を望み、何を求めておられるかなどとは、おおよそ考えたこともなかったほどに、不義理を重ねてきたことを悟らせるのです。

ちょうど、親からきちっと仕送りを受けて生活しているのに、親には感謝の一言どころか何の連絡もせず、遊び暮らしている息子のようです。そしてその不義理を改めてお詫びした上で、心から「有難うございます」と礼を言い、「これからはいつも感謝しながら、あなたに喜ばれる生き方をしていきたいと思いますので、どうか助けてください」と、お願いすればよいのですと、お教えすることです。

日本人に罪と言っても、なかなか分かってもらえません。せいぜい犯罪くらいに思われてしまいます。ところが日本人にも、高潔な神の前に出るには、自分はふさわしくないという、穢れの意識があります。神社には口を濯ぎ、手を洗うための水があります。滝に打たれて身を清めたりもします。

その穢れの意識こそ、日本人にとっては、罪という言葉で理解できる罪よりも、実は罪の本質に近いところがあるといえます。神のみ心をないがしろにし、神のみ思いに反した生き方、すなわち不義理な生き方こそ、最も重大な穢れであり罪であることを知ってもらえば良いのです。罪人だから悔い改めなければならないという話では、到底納得せず、しまいには怒り出してしまう日本人も、恩に報いず不義理をしているといえば素直に認め、穢れているので清めが必要だといえば納得できるのです。

日本人に必要なことは、日本人が昔から本能的に感じ、心の中でそっと崇めてきた方が、天地をお造りになった神であると知ることです。その神が日本人を愛し、日本を祝福しておられるのに、日本人は充分な感謝もせずにおざなりに扱い、ないがしろにして来たことを認めることです。それでお詫びをし、感謝をし、礼拝をし、賛美をしながら生きること知ってもらうことです。また、助けが必要なときには、たとえまだ良くは理解していなくても、この神にお願いするならば、必ずお応えくださることを教え、この神に頼る気持ちを起こさせることです。

まじめな日本人ならば、少しばかりでも神様の祝福を実感すると、はたして自分は、この神の祝福を受けるには、ふさわしいものだろうかと感じ、この神に助けを求めるだけの資格がないと、思うところがあるはずです。あるいは自分は穢れているので、高貴な神に近づくことはできないと、言い出す人もいるでしょう。ただ、謝るだけで事足りるとは思わない人がいることでしょう。

そのような人にこそ、キリストを通しての贖い、神が準備してくださった解決方法、穢れを完全に洗い流す方法について、お話しすることができるのです。始めから、誰かれとなく、罪だ、悔い改めだ、十字架だ、赦しだという話では、とても聞いてもらえなくても、このように話を持っていくならば、聞いてもらえる場合が多いのです。

私たちが日本人に語るべき福音、ユダヤ人にでも西欧人にでもなく、日本人に語るべき福音は、十字架による罪の赦しではありません。十字架による救いの福音を語ろうとすると、必ず、まず、罪を憎んで、厳しい刑罰を準備しておられる、怖い神の話をしなければなりません。でも、怖い神、怒りの神を最初に語ってはならないのです。罪の赦しを願わなければ、地獄に落とすと怒っておられる、神の脅しを語ることは福音ではありません。

そうではなく、私たちが日本人に語る福音は、私たちを造り、私たちを愛し、私たちが幸せに生きることを望んでおられる、気高く聖く、優しく強く、恵み深い方がいらっしゃるという、素晴らしい事実であるべきなのです。十字架による無代価の救いよりも先に、慈愛に富む創造者が、私たちの穢れにもかかわらず、私たちを生かし続け、祝福し続けて

こられた事実が大切なのです。無代価の救いは、神様の恵みの最も大きな現れ、最高の形です。しかし、それを最初に語ろうとしてはならないのです。

滅びる者を救いたいと望み、困っている者を助けたいと願い、頼って来る者を決して拒まない、優しい神がいてくださるという事実が、先行すべき大切な真実であり、福音なのです。どんなに不義理を重ね、穢れ切った人間でも、決して見捨てずに、幸せにしたいと望んでおられる神が、今、穢れた人々が頼って来るのを待っておられるという、緊迫した事実が福音なのです。この神に信頼する限り、恐れるものは何もないという事実です。本当の悔い改めは、怖い刑罰を前にして、恐怖に震えながらするものではありません。優しい赦しと、その赦しのために痛んでくださった、大きな愛に打たれて、後悔と、申し訳なさと、感動の涙を流しながらするものです。

どれほどの悪人でも、神は赦し受け入れることができると、話してあげましょう。もちろんそれは、キリストの贖いがあってのことです。ですから必要ならば、また、機会があるならば、キリストを通しての贖い、赦し、清め、義についても教えてあげましょう。そうするならば、キリストの存在こそが、福音であることも明白になるのです。

私たちの神は、私たちが一度は失った命を、取り戻させてくださることも、大きな福音です。日本人の神概念にはないことですが、私たちの神は、私たちに永遠のいのちを与えてくださるお方です。永遠のいのちとは、ヒンズー教が教える輪廻ではないことも教えてあげましょう。命がただ永遠に続くだけではないことも、教えてあげましょう。私たちの肉体がまったく新しい栄光の肉体となり、私たちの性質もキリストに似るものと作り変えられるのです。

私たちには、新天新地というまったく新しい完全な生活環境が与えられることも、話して上げましょう。その完全な環境に入れられる私たちは、その環境にふさわしいように、完全な肉体と完全な精神を与えられるのです。どんなに完全な環境に入れられても、入れられる私たちが不完全のままでは、幸いな生活はあり得ないからです。私たちは神様との豊かな交わりの中に入り、人間としての最高の喜びを味わいながら永遠に生きる、大きな望みを持っているのです。このような福音は、神道にも仏教にも、ほかのどのような宗教にもないものです。

私たちは聖書が教える、全人類に与えられている福音を、日本人にもわかりやすく語りたいものです。